

【翻訳】

1851年の『新雑誌』の計画について

イリーナ・フント 著
(橋本直樹 訳)

訳者はしがき

本稿は、Irina Hundt: Zum Projekt der „Neuen Zeitschrift“ von 1851. In: *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung*, H. 7, Berlin 1980, S. 95–102 の邦訳の試みである。

訳文中の // / 内の数字は底本のページ数であって、各ページの開始箇所にほぼ相当する文節の切れ目等の位置に配してある。注記については、原語のままの方が種々の点で便宜と思われたので、それを転記するに留めた。また、後注を脚注とした。必要に応じて()内に原語を示した。[]内は訳者の補足である。

本論文では、表題から明らかな通り、本誌第76号に訳載したカール・オーベルマン「同盟中央指導部のケルンへの移転」の末尾で言及されている『新雑誌 (Die Neue Zeitschrift)』の創刊へ向けた努力が取り扱われている。その意味で、本稿はオーベルマン論文のこのテーマでの詳論と位置付けてよい。短文ながら、この雑誌について立ち入って論じた唯一の論考である。

この『新雑誌』はケルンの共産主義者同盟中央指導部が中心となって1851年春に計画されたものの、こうした活動を怖れたプロイセン政府の弾圧によって実現することなく終わった。この折のドイツ各国警察当局による同盟員たちの逮捕は1852年のいわゆる「ケルン共産党裁判」に至った。わが国の「松川裁判」に一世紀ほど先立つ、同種のでっち上げ裁判の最初である。

この時期の共産主義者同盟の活動については、本稿でも言及のあるように、シュロモ・ナアマンによる論文がまとまった最初の研究である。が、史料の不十分さや文書の解釈の点で種々の誤りを含んでいた。著者は『新雑誌』という限定された視点からだけではあるが、ナアマンの誤謬を的確に批判している。マルティン・フントによるナアマンに対する最初の批判論文「『共産党宣言』と1848/49年革命後の共産主義者同盟の活動」(Martin Hundt: Das Kommunistische Manifest und die Tätigkeit des Bundes der Kommunisten nach der Revolution von 1848/49, *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 22 (1974), S. 325–330. 後に *125 Jahre Kommunistisches Manifest und bürgerlich-demokratische Revolution 1848/49. Referate und Diskussionsbeiträge*, Berlin 1975, S. 131–138 に再録)に連なるものである。

/95/ 定期的に刊行される自分たちの機関誌を得ようと努めることはマルクスおよびエンゲルスの党把握における根本原理であって、——本稿において明らかにされる通り——特に共産主義者同盟史全体に典型的であった。

1848/49年革命敗退後の時期には、そのような機関誌を発行するための特別な事情と任務があった。マルクスおよびエンゲルスは1850年に『新ライン新聞。政治経済評論』[以下、『評論』]によって、ドイツにおいて再び強まった反動の状況の下、共産主義者たちの合法的ジャーナリスト活動がなおどれほど可能であったのかについてその一例を示した。1851年初めにはこれらの経験の継承が重要であった。ケルン中央指導部が1850年9月の同盟分裂の諸結果を政治的にも組織的にも克服し、宣伝活動の強化に着手したが、それと同時に『評論』の継続の不可能なことが明らかになったからである。

ケルンの同盟員たちはすでに1850年の初め以来、当時党の前に客観的に存在していた「宣伝結社」¹としての任務に対応するため、種々の形態の宣伝活動に鋭意取り組んでいた。彼らは、テデスコ²やヴィルガルデル³の仮綴じ本をフランス語から翻訳し、印刷して、普及しており、『評論』の販売に特に積極的に協力し⁴、『共産

党宣言』の新版⁵およびマルクスの『論文集』の出版⁶を準備しており、ローラント・ダニエルスは1850年7月19日付のマルクス宛の手紙においてこうした政策ならびに今後の諸任務に関する全般的な考察をもしたためていた。

こうした枠組の中に『新雑誌』という表題が予定されていた理論的雑誌を発行する計画も属していたのであって、//96/その計画は1851年の2月頃から3月初めにかけてケルン中央指導部において具体化しつつあった。

筆者はたまたま、エルンスト・ドロンケの伝記を研究していた際に、彼が1851年春に『新雑誌』のために論文——すなわち1848年のイタリア革命の教訓に関する——を書いたという事実に出会った。この論文は遺憾ながら伝承されていないとはいえ、筆者はその研究に鑑みこの雑誌の性格に関して何か述べなければならないと感じていた。しかも、すぐにも明らかとなったのは、この雑誌はわが国の文献においてこれまであまりにもなおざりにされていたということであり、ナアマンの著作およびオーベルマンの著作でだけ多少具体的な言及があるほかはいずれにせよまだまとまった論述は存在しないということである。

「月刊誌あるいはそれに類する雑誌の発行を

¹ Karl Marx: Enthüllungen über den Kommunisten-Prozeß zu Köln. In: MEW, Bd. 8, S. 409, 414; ders.: Herr Vogt. In: MEW, Bd. 14, S. 438.

² Siehe Hermann von Berg: Die deutsche Fassung des „Katechismus des Proletariats“ von Tedesco. In: ZfG, 1970, H. 1, S. 76–87.

³ Siehe Die Versöhnung der Interessen in der Association mit Anwendung auf die Bedürfnisse des Gemeindelebens. Von Villegardelle. Aus dem Französischen, Köln 1850. — Siehe auch Roland Daniels an Marx, 19. Juli 1850. IMLB/ZPA, Ms. 1000.

⁴ Siehe Martin Hundt: Die Geschichte der „Neuen Rheinischen Zeitung. Politisch-ökonomische Revue“. In: Marx–Engels–Jahrbuch 1, Berlin 1978, S. 268/269, 276–278.

⁵ Der erste Nachweis bei Herwig Förder: Die Nürnberger Gemeinde des Bundes der Kommunisten und die Verbreitung des „Manifests der Kommunistischen Partei“ im Frühjahr 1851. In: BzG, 1962, Sonderheft: Beiträge zur Marx–Engels–Forschung in der DDR, S. 185–188.

⁶ Siehe MEGA² I/10, S. 493–497, 1020–1023.

計画することは必要不可欠である」と、ヘルマン・ベッカーは1851年4月5日にマルクスに宛てて書いた⁷。個々の準備作業については、ヨーゼフ・ワイデマイアーが1851年3月半ばに短期間非法でフランクフルトからケルンを訪れた際に、ベッカー、ハインリヒ・ビュルガースおよびワイデマイアーの間で具体的な相談があった⁸。ダニエルスもこの相談に参加したとみなされるべきである。この協議の結果は『新雑誌』のための株式申込署名を呼びかける形式の目論見書(Prospekt)であった⁹。ワイデマイアーが、ケルンに移住し、ケルンで生計の資を得て『新雑誌』をとともに編集するために、アメリカ向けの石版刷り通信を発行することも計画された¹⁰。

この目論見書は——アムステルダム社会史国際研究所のヴィルヘルム・ヴォルフのコレクションのなかに唯一伝承されていたものに基づいて、コシークおよびオーベルマンが1975年に初めて公表したのだが——当時一般に行われていたように、広告ビラとして印刷されていた。『新雑誌』の宣伝は新聞においても行われた。例えば、ハノーファーで発行されていた『ドイッチェ・アルバイターハレ(Die Deutsche Arbeiterhalle)』は4月26日付の第17号において「文献」の見出しでつぎのような記事を書いた。すなわち、「H. ベッカー、H. ビュルガースおよびJ. ワイデマイアーは『新雑誌』という表題の雑誌をケルンで発行する計画を立てている」。『アルバイ

ターハレ』は続けてケルンの人々の目論見書の内容を引用し、さらにこう書いた。すなわち、「諸労働者協会にこの企画を支援するよう本誌は切に求める、そして『ドイッチェ・アルバイターハレ』編集部は喜んでその仲介の労をとることを表明する……」。

この雑誌は——警察の弾圧が強まったため——外国(具体的にはベルギーのベルビエ)で印刷され¹¹、5週に一度、したがって//97/一年に11号、そのうちの1号は合冊号として発行されることになっていた。年間予約購読料は4ターレル24グロッシェンとなる予定であった¹²。1851年4月5日にマルクスはつぎのようにヘルマン・ベッカーから詳細を伝えられ、寄稿を求められた。すなわち、「われわれは、知的に強化されなければならない党のため、拠金を大規模に行うことを計画している。雑誌には『新雑誌』という誌名しかなく、いずれにせよ責任を負えるもの以外は、序言等なものをも誓わず、編集者名も掲げない。君がこの計画に賛成ならば、企画者にただちに諸寄稿が届くように留意してくれたまえ。[……]直ちにキンケル対マルクスの一件のハンブルクの文書を送ってくれ。一件はここでさし台の上にはりつけられることになるだろう」¹³。

マルクスは4月9日に早速こう返事した。すなわち、「キンケル一派の書いた愉快な駄文を同封する」¹⁴。それがどのようなものであった

⁷ IMLB/ZPA, Ms. 1000.

⁸ Siehe Karl Obermann: Joseph Weydemeyer, Berlin 1968, S. 217.

⁹ Abgedruckt in: Zeitgenossen von Marx und Engels. Ausgewählte Briefe. 1844–1852. Hrsg. von Kurt Koszyk und Karl Obermann. Assen /Amsterdam 1975, S. 407/408.

¹⁰ Siehe Joseph Weydemeyer an Marx, 16. Juni 1851. IMLB/ZPA, Ms. 1000.

¹¹ Siehe Hermann Becker an Marx, 29. April 1851. IMLB/ZPA, Ms. 1000.

¹² Siehe Zeitgenossen ..., a. a. O., S. 408.

¹³ Hermann Becker an Marx, 5. April 1851. IMLB/ZPA, Ms. 1000.

¹⁴ MEW, Bd. 27, S. 548 [549 (?)] .

のかは分かっていない。雑誌を準備するうえで、ロンドンにおけるヴィリヒ/シャッパーら分離派のルイ・ブランとの結び付きに関連した、またとりわけキンケルを取り巻く小ブルジョアのグループとの結び付きに関連した、一連の諸文書に重要な意義のあったことはまぎれもないところである。とりわけキンケルの名と結び付いていた政策との論争が、『新雑誌』の特徴および目的について編集部が第1冊にのせる声明に代わって、その政治的立場を明瞭にするはずであった。それゆえ、雑誌を準備することと関連して4月初めにケルン中央指導部においてマルクスが送った資料に関する議論があったのは確実である。4月12日にダニエルスはマルクスに宛ててこう書いた。すなわち、「私はつい今しがた君の手紙を受け取り、キンケルのを楽しんでいる」¹⁵。同じ時期のマルクスとエンゲルスの往復書簡の中には、キンケル熱と反共産主義との関連に関しての、また、ヴェストファーレンおよび北ドイツにおける「ヴィリヒ/シャッパー、ルーゲ/キンケル、ベッカー/ジーゲルの共通の利害からする」陰謀に関しての、当てこすりがある¹⁶。

冒険主義と通俗民主主義とのこうした連合に反対する明確な態度をとる必要のあることを『新雑誌』の発行者たちが十分に理解していたのは明らかであった。というのは、彼らは、マルクスおよびエンゲルスがひと月前にそれを開始していたのとまったく同じ諸論点からその論

争を継続しようとしたからである。すなわち、キンケルに対しては、『評論』における、またいわゆる革命公債との関連における論点、ルーゲに対しては、『ブレーマー・ターゲスクローニク (Die Bremer Tageschronik)』における論点、ヴィリヒに対しては、彼から引き出した冒険主義的手紙に関連する論点、そして分離派とルイ・ブランその他との無原則な同盟に対しては、1851年2月24日のロンドン会議に際しての論点である。

ベッカーは、1851年4月29日にマルクスに宛てた手紙において、その後さらにマルクスの「手に//98/入ったヴィリヒ=キンケル=ブランの陰謀に関する諸文書」を送ってくれるよう改めて依頼し、「この將軍の革命的能力を描写するために」マルクス宛の「ヴィリヒの第二の手紙」を雑誌に使ってよいかどうか問い合わせた¹⁷。ベッカーは5月の初めに、「ルーゲの策動に反対して」行動するため、ブレーメンに行くつもりであった¹⁸。そしてベッカーの北ドイツを巡る旅行と同時に、ハンブルクにおいてハインリヒ・ビュルガースは、反キンケル欄のためにゲオルク・ヴェールトを獲得しようと尽力した¹⁹。

『新雑誌』の目論見書の中でつぎのように言われているのは、まさしくこの具体的で文書によって裏付けられた論戦が意図されていたのである。すなわち、本誌においては「民主主義諸分派の本当の諸原理、諸分派間の相違や微妙な差異が論究されることによって [……] まさに

¹⁵ Roland Daniels an Marx, 12. April 1851. IMLB/ZPA, Ms. 1000.

¹⁶ MEW, Bd. 27, S. 238.

¹⁷ Hermann Becker an Marx, 29. April 1851, a. a. O.

¹⁸ Siehe ebenda. — Siehe auch MEGA² I/10, S. 1016 (Zur Entstehung und Überlieferung der „Erklärung gegen Arnold Rugé von Marx und Engels“).

¹⁹ Georg Weerth an Marx, 28. April 1851. In: Georg Weerth: Sämtliche Werke in fünf Bänden, hrsg. von Bruno Kaiser, Bd. 5, Berlin 1957, S. 403/404.

諸分派の本来の立場が見出されるであろう。というのは、これまでただ薄明のなかであいまいに輝いていた非常に多くのきまり文句や奇妙な論理がついに批判の前で自らの正当性を論証しなければならない時がきたことが確実だからである。[……]さもなければ、民主主義を実際に導入するのが問題であるときに、わが党における無知と混乱のためにまたしても反動の仕事を楽にするということがないとはいえない。民主主義は自分自身の隊列を整理しなければならない」²⁰。

この説明が、シュロモ・ナアマンの論文「共産主義者同盟の活動の第二期におけるドイツにおけるその歴史について」においては、言うところの「ケルン中央の態度の不一致」として、また「同盟と新聞との混淆による」不可避の危機のきわめて明瞭な表現として、完全に誤って解釈された²¹。ナアマンによれば、いわゆる「単純な同盟員たち」は、民主主義者として現れ、首尾一貫した民主主義諸勢力と限定的な協力を行うというこのような政策を理解できなかったというのである。しかしながら、『新雑誌』の立場を表わす予定された諸素材の特徴、そしてこれらの素材が公表されることになっていたやり方、すなわち「どんな前口上もそれに類するものも……余計である」²²というやり方は、マルクスおよびエンゲルスによる「1850年3月の呼びかけ」において示されていた政治路線がここで完全な意味で実現されるはずであったと

いうことをはっきりと証拠立てている。

マルクスおよびエンゲルスには『新雑誌』の準備の経過が絶えず知らされていた²³。さらに彼らの直接の協力が見込まれていた。つまり、ベッカーは第1号に『哲学の貧困』第1章のドイツ語訳の掲載を予定していた。それに関して彼はマルクスに宛てて4月29日に手紙を書いた。マルクスはその翻訳を直ちにベッカーに送り、彼に自身の考えを伝えた。ベッカーは5月6日ないしは7日にこう返事した。すなわち、「反ブルードン論が到着した。//99/『論文集』がさらに進展する場合には著作全体を新雑誌に載せるわけにはいかないというのは君の言う通りだ。……」²⁴。ベッカーは同じ手紙の中でケルンの人々が具体的な諸資料をエンゲルスに送るべきかどうかを尋ねた。この箇所は、文脈からして、こう解釈するほかない。つまり、エンゲルスが1851年5月初めに『新雑誌』のための論文に取り掛かっており、その論文はおそらくドイツの焦眉の政治的諸問題に関わるものであった、と。

マルクスおよびエンゲルスがどれ程この雑誌に協力しようとしていたかを最も明瞭に示しているのは、つぎのようなエンゲルスの1851年5月9日付のマルクス宛手紙である。すなわち、「われわれは必要とあればすぐまた機関誌をもつことになるだろう。そしてわれわれはその誌上であらゆる攻撃に対してそれがわれわれに起因するものと思われることなしに撃退すること

²⁰ Zeitgenossen ..., a. a. O., S. 407.

²¹ Shlomo Na'aman: Zur Geschichte des Bundes der Kommunisten in der zweiten Phase seines Bestehens. In: Archiv für Sozialgeschichte, Bd. 5, Hanover 1965, S. 71.

²² Siehe Hermann Becker an Marx, 6 oder 7. Mai 1851. IMLB/ZPA, Ms. 1000. — Siehe auch Adolph Bermbach an Marx, 24. Juni 1851, ebenda.

²³ Siehe u. a. MEW, Bd. 27, S. 243.

²⁴ Hermann Becker an Marx, 6. oder 7. Mai 1851, a. a. O.

ができる。これがケルンの人々がもくろんでいる月刊誌がわれわれの『評論』に優る点の一つだ」²⁵⁾。さらに、同じ関連でデイヴィッド・ナットというロンドンの書籍商についてベッカーが述べている「D. ナット には私が手紙を書きましょう……」²⁶⁾という記述は、マルクスおよびエンゲルスが『新雑誌』に載せる書評のための新刊書を、1850年の『評論』のときにそうであったように、そこから受け取るようになっていたということを示している²⁷⁾。

計画された雑誌第1号のその他の執筆者にはローラント・ダニエルスおよびエルンスト・ドロロンケが予定されていた。二人の論文はすでに出来上がっており、マルクスの『哲学の貧困』第1章と併せてそれらの論文でその第1号が開始されることになっていた²⁸⁾。ダニエルスの論文は彼の著書『ミクロコスモス』の序説であって、そこで彼は自然科学および医学の若干の問題にはじめて史的唯物論を適用しようとする試みを行っていた。ダニエルスの寄稿は『新雑誌』の唯一伝承されている論文——もちろん『哲学の貧困』を除いて——である。

ドロロンケはジュネーヴから1848年のイタリア革命に関する論文を送っていたが、それは19世紀前半のイタリア史に関する歴大な文献を比較的長期にわたって研究した成果であった²⁹⁾。エ

ンゲルスは1850年12月のマルクスの勧めに基づいて『評論』の継続のため同じテーマを研究しようとしていたことが付言されてよい³⁰⁾。したがって、この点でも『新雑誌』はマルクスの言う意味で『評論』の間接的な継続とみなすことができる。

1851年5月8日にビュルガースおよびベッカーはケルンを旅立った。それには雑誌の件も入っていた。彼らはまずハノーファーに向かい、その地で民主主義者大会に参加し、出席していた北ドイツの民主主義者たちの代議員たちと『新雑誌』の資金援助について話し、株式を提供することによって雑誌を発行するために必要な資金を受け取った³¹⁾。このような交渉は//100/上首尾であった。つまり、まとまった金ならびに送付先の、そして東プロイセン、シュレージエンおよびザクセンの民主主義者たちへの紹介状の、入手に成功したからである。——ベッカーはハノーファーからケルンに戻り、ビュルガースは旅を続けた。彼はハンブルクに赴き、とりわけそこで共産主義者同盟員のフリードリヒ・マルテンスが指導するハンブルクの労働者教育協会に現れて、計画されている雑誌の資金援助を得ようと努めた。ビュルガースはベルリンを経由してプレスラウに向けてさらに旅を続けた。彼はそこで『新オーデル新聞』(Die Neue Oder-

²⁵⁾ MEW, Bd. 27, S. 253.

²⁶⁾ Hermann Becker an Marx, 6. oder 7. Mai 1851, a. a. O.

²⁷⁾ Siehe Martin Hundt: Die Geschichte ... , a. a. O., S. 277.

²⁸⁾ Siehe Hermann Becker an Marx, 29. April 1851, a. a. O.

²⁹⁾ Siehe Ernst Dronke an Ferdinand Lassalle, 6. Januar 1850. In: Ferdinand Lassalle: Nachgelassene Briefe und Schriften, hrsg. von Gustav Mayer, Bd. 2, Stuttgart / Berlin 1923, S. 28–30. — Dronke an Weydemeyer, 24. März 1850 und etwa 1. September 1850. In: Zeitgenossen ..., a. a. O., S. 332 und 359/360. — Dronke an Engels, 6. Juni 1853. IMLB/ZPA, Ms. 1000.

³⁰⁾ Siehe MEW, Bd. 27, S. 152, 155.

³¹⁾ Siehe Hermann Becker an Marx, 6. oder 7. Mai 1851, a. a. O., — Adolph Bermbach an Marx, 24. Juni 1851. IMLB/ZPA, Ms. 1000. — Aussagen von Heinrich Bürgers. St. A. Potsdam, Rep. 30 C, Tit. 94, Lit. B, Nr. 320.

Zeitung)』の編集者たちと協議した。彼のすぐ次の滞在地はドレスデン、ライプツィヒおよびマゲブルクの予定であった。しかしながら、彼は5月23日にドレスデンで逮捕された。ベッカーはすでに4日前にケルンで逮捕されていた。ワイデマイアーはフランクフルト・アム・マイ

ンの近くで警察から身を隠さなければならなかった³²。

共産主義者同盟に対する1851年半ばの大規模な迫害措置によって、『新ライン新聞。政治経済評論』の事業を継承するはずであった理論的機関誌を発行する試みもまた破綻した。

³² Siehe Joseph Weydemeyer an Marx, 10. Juni 1851. IMLB/ZPA, Ms. 1000.

付記

本稿は2012年度科学研究費補助金・基盤研究(C)研究課題名「『共産党宣言』の起草者名の普及史」(課題番号21530182)の研究成果の一部である。